

【研究ノート】

パーフィットの一人称に関する問題について

Parfit's Problem of First Person

坂倉 涼

SAKAKURA Ryo

要旨 デレク・パーフィットはその著書『理由と人格』¹⁾において、一人称「私」、または人格の同一性に関して、これら概念を用いての記述を、これら概念を用いない記述に還元する試みが妥当であることを主張している（還元主義的見解）。本稿は、パーフィットが還元主義的見解を支持するものとして提出している二つの議論に関して考察を加える。それら議論から直接的に還元主義的見解が導出できるわけではないという点を示すことが、本稿の目標である。

0. はじめに

前半の節では、パーフィットの「分裂の思考実験」を考察する。パーフィットはこの思考実験を論じることで還元主義の擁護へと進むが、本稿の論述は、そもそもこの思考実験を理解することのうちに一人称の観念の理解が包含されているのではないかという点を示すことを目標とする。心理学的、生理学的、物理学的な性質のなかには、ある人物を私たらしめている特質を見出すことはできないが、それでも「私」観念には重要な意義があるのではないかという点を論じる。

後半の節では、「スペクトラムの思考実験」を取り上げる。その際、人格の同一性に関する一人称的基準と三人称的基準の区別という論点を提示し、この論点が適切に思考されなければ思考実験の意義を精確に見積もることは困難であるということを指摘する。また、思考実験に含まれる循環性を指摘する。

1. 分裂の思考実験²⁾

下部脳の上の二つの大脳半球、右脳と左脳は、一束の繊維によって結ばれている。われわれは左手の活動を右脳で支配し、視野の左半分にある物を右脳で見ており、そして右手の活動を左脳で支配し、視野の右半分以上を左脳で見ている、ということが知られている。この繊維を切断した患者に次のような事態が生じる。

これらの人々の一人はワイド・スクリーンを見せられる。その左半分は赤く、右半分は青い。それぞれの暗い影の部分に「いくつ色が見えますか？」という文字がある。

¹⁾ parfit [1984]. なお、以下、訳出に際しては、森村 [1998] に準拠した。

²⁾ ibid., p. 245.

その人は両方の手で、「一つだけ」と書く。今度は文字は「あなたに見える唯一の色は何ですか？」に変わる。彼は片手で「赤」と書き、別の手で「青」と書く。

この人物の中には「赤を見る主体」と「青を見る主体」が分割して存在しているかのようである。赤を見る主体は、青を見る主体が何を見ているかを知らず、逆も真である。赤を見る主体は、もしかしたら、青を見る主体、つまり左脳主体がコントロールしている右手を見ることができ、その手が「青」と紙に書き付けるのを見るかもしれない。しかしその右手は、右脳主体にとって、われわれが隣の人が字を書いているのを見る時に見ている、そのときの隣人の手と、何ら変わりはない、「他人の手の活動」かもしれない。

パーフィットはここから次のように議論を展開する。この患者は、脳が分割されるまでは一人の主体だった。そこから、脳の分割により、右脳主体と左脳主体が分裂して生じた。もし分裂前の主体が「私」であったなら、分裂後の右脳主体（今後ライティと呼ぼう）と、分裂後の左脳主体（今後レフティと呼ぼう）の、どちらがその私となるのだろうか。ライティにとって、レフティの経験を内側から体験することはできない。それは別のもう一人であるかのよう、他者であるかのようであり、事情はレフティにとっても同様である。そうすると、分裂前の私は、分裂後には、ライティになるのか、レフティになるのか。それとも、いずれも私なのか、いずれも私ではない、のであろうか。

われわれは次のように想定している。未来のある人物は、私であるか、私ではないかのいずれかである。ある人物が部分的に私であるということはない。「私は部分的に苦悶しているだけである」ということは想像できる。……しかし誰かが十分に苦悶を意識しているならば、この人物が部分的に私であるということはあるまい³⁾。」われわれはこの想定を次のように表すことができる。未来の人物を任意に取り出してきたとき、その人物が私であるか、私ではないかは、一意に決定している。パーフィットはこの要件を「オール・オア・ナッシング」要件と呼ぶ。

パーフィットが「分裂」の話を導入するのは、このオール・オア・ナッシング要件を下支えしているような「私に関する事実」などない、と論じるためである。私がライティであることはない。なぜなら、ライティが分裂の前の私から引き継ぐ「まったく途切れのない」心理的継続性は、そのまったく同じものを、レフティも継承しているのであり、わたしが取り立てて「ライティこそ私である」とするなら、それは恵古最眞にすぎないからである。同様のことはレフティにも当てはまる。ではどちらも私ではないのか？しかし、私の正常な生が単線的に進行するのとまったく同じように、私の生は適切な継続性を保って、ライティの生に引き継がれていく。もしかしたらライティは分裂後のレフティについて何も知らないかもしれない。その場合、私から引き続くライティの生は、分裂などまったく生じない通常の私の生と何ら違いはないだろう。この意味で、ライティが私でないとしたら、それはおかしいことではないだろうか（このことはもちろん、レフティについても同様に言える）。

われわれに言えることは、私から二つの生が分岐し、どちらの生も分裂前の私と適切な心理的継続性を有している、ということだけである。そしてこれが全てである、とパー

³⁾ ibid., p. 234.

フィットは論じる。その記述において取りこぼされたものは何もない。「分裂後のどちらが私か」には言及されていないが、それはそれに関する記述を怠ったためではなく、そもそもその問いに確定的な答えを与える事実など存在しないからである。「私」とは、ヒュームの言うように「国家」と似ている存在者であり、国家については、その地域、住んでいる人々について記述することによって記述されるべきものがすべて尽くされているのと同じように、「私」に関係する事実は、心理的継続性と、その継続性を統一的に意識する意識の存在、脳、身体、われわれの経験、を記述することで、全て尽くされるのである。「私に関するさらなる事実」など存在しない。この意味で「人格の同一性」はわれわれにとって重要ごとではない、とパーフィットは論じる。「私に関するさらなる事実」として私たちが思考しているかに思われる事柄は、そのような事実を想定しない世界の事実の記述にすべて還元されるべきである。

2. 一人称—三人称非対称性

デカルトは、「思考するもの」として「私」を規定した後に、身体的存在としての他者について、それは本当に私と同じように思考をしているのか、心を持っているのか、という懷疑を表明した。そこにおいて、心を持つかどうかが懷疑されている対象の中に、「私」は包含されていない。「物体」として対象を捉えることを、その対象に関する「三人称的な捉え方」と呼ぶことにしよう。すると、なによりも「私」は「思考するもの」であり、そのような「物体」としては、つまり第一義的に身体的存在者でなければならないようなものとしては、考えられていない。デカルトその人にとってその「私の思考」の存在は方法的懷疑の実践の成果として導出されたものであり、他者の心の存在と異なり、唯一懷疑から免れたものである。そしてデカルトの疑いの対象となるのはあくまでも「他者」であり、デカルトその人の存在ではない。このような記述がデカルトの正当な釈義であるかどうかはさておき、次の点を問題にしよう。デカルトその人にとり懷疑は他者に向かい、そしてデカルト自身の存在は疑いを免れたものであるが、数ある身体的存在者のなかで「特定のこの身体」がデカルトの「私」であることを保証するものは何なのだろうか。世界にはおびただしい数の身体が存在し、それら身体をいくら仔細に調べても、任意のひとつを「私であるもの」か「私ではないもの」かに確定的に分類することに根拠を与えるような客観的な心理学的、生理学的、物理学的特質など一つも見出されない。それにもかかわらず「この身体」（この句で各人それぞれの自分自身の身体を思い起こしていただきたい）が「私の」身体であるのは、その人自身にとって疑いようのない事実である。

「自—他」の区別がデカルトその人とそれ以外の人との間に設定されるなら、区別はデカルトの身体とデカルト以外の身体との間に引かれる。しかし区別を、「思考するもの」とその思考が帰属させられる身体的存在との間に引くならば、問題は「なぜ思考がこの身体に属していなければならないのか」というものになる。「この身体だけが私であるのはなぜなのか」（そして本稿ののちの議論を先取りするなら）「なぜ私だけがこの身体であるのか」ということが問題である。デカルトの考察からの帰結として、私は思考する存在として本質的に「一人称」であるのだが、この「一人称的思考」は、世界に数多ある物体的、物理的な「三人称的諸身体」の中の一つと同一のものである。それら生理学的にたいした

違いはない多くの身体の中のとりわけて「この身体」をその一人称的思考の存在と同一としている事実は、何であろうか。

3. 信念帰属に関する制約

私は多くの身体の中で「この身体」だけを自分自身と同一と見なしている。私は、他者の思考とは対照的に、自分の思考を、自分の身体や表明された言葉を観察せずとも知ることができる。ところで私は、「思考するもの」としての自分に対してある属性を帰属させ、そしてそれと同じ属性が世界の中のほかならぬ「この」身体にも帰属していることを発見することによって、その属性間の同一性の認識をもって、その身体を自分自身であると同定するのか。このような性質間の一致が、私に数多くの身体から自分の身体を識別するための基盤を提供しているのか。このような見解を「性質間の一致による自己同定の見解」と呼ぼう。

自分が持っているとして私が知っているところの性質と同じ性質を備えているということから、「この身体」が自分自身であると判定する、ということがわれわれが自己同定する場合の範例であると考えすることはできない。そのためには、「この身体」の特徴と一致したりしなかったりするなどの特徴を自分が持っているか「この身体」の観察以前に」私が知っていなければならない（そうでなければそこで発見された特質と「この身体」の特質との一致、不一致が言えない）が、われわれはいま「自己同定」を問題にしているであり、それら特質を持っている自己とはどの存在者なのかをまだ確定していないからである。それゆえ、どの存在者の特質を問題にしていにかまだ私は知らない。また、自己を「この身体」として、特定の人物像として同定する以前にそのようなことが可能なら、そもそも自己が「この身体」と同一であるかどうかということをいまだに問題にすることは無用である。なぜならその場合、自己と同一であるところの身体が持つ特質はすでに知られてしまっているだろうからである。

「性質間の一致による自己同定の見解」は批判された。ところで、次のような事例を考えてみよう。

私は喫茶店のような装いの部屋に座っている。隣のスクリーンには実寸大の男の映像が映っており、貧乏ゆすりをしている。私はそれを見て、行儀が悪い男だと考える。しかしスクリーンの映像は私である。知らず知らず貧乏ゆすりをしている私をモニターがリアルタイムで捉え、その映像をスクリーンに映し出している。私は自分自身を他人であると誤って考えてしまったのである。

スクリーンの男は、自分が貧乏ゆすりをしているのを知らない（なぜならその男は私自身であり、私は知らず知らず貧乏ゆすりをしているからである）。しかし私は、その同一の男について、彼が貧乏ゆすりをしているのを知っている。では私は、自分は貧乏ゆすりをしている、という信念を、持っているのか、持っていないのか。一人称的にも三人称的にも帰属しうる性質に関しては、それら両者の帰属の実践の間に齟齬が生じることは、信念の内在的な論理によって阻まれているのだろう。そのような性質に関しては、一人称的

な帰属と三人称的な帰属とが適切な相関のものとされるのが、そのような性質帰属を可能にする条件の一部を構成しているのだろう。

私が自分に内側から帰属させる性質と、私がある人物像に三人称的に帰属させる性質とが乖離しているがために、私はその人物を自分自身とみなさないが、実際は自分自身であるような場合に関して、さらに別の例を考えよう。次のことが一般に成り立っているとす。人は、非常に疲れていて興奮状態にあるとき、自分を快活であると考えてしまうようなことがある。だが、自分は快活だと感じるとき常にそのような誤りをおかしているということはない。

今、私は内側から溢れる活力を感じており、自分が快活であると信じている。そして自動車の窓ガラスに、疲れた顔が映っているのも認知している。私はその人物像について「彼は疲れている」と疲れを帰属させる。私が自分に快活さを帰属させるなら、その人物像自身も自らに快活さを帰属させていることになる（なぜならその人物像とは私自身なのだから）。つまり、「その人物像は、自分自身が快活であると信じている」と誰かが言うとしたら、それは正しい。このような状況で、私は、その人物像は疲れているのだから、その人物は自分が疲れているのだと信じているだろう、と判断して、「彼は自分が疲れていると信じている」という信念帰属をするかもしれない。この二つの帰属は対立する。

自己知に関する諸議論によると、自己に関しての一人称的な状態帰属は、その同じ人物に関する三人称的な状態帰属と適切な相関関係のもたなければならない。上記の事例で、三人称的な「疲れている」ことの帰属、一人称的な「疲れていない（快活である）」ことの帰属という対立が生じてしまった。次のように論じられるかもしれない。この対立は、対立する内容を私が「知らずに同一人物に」帰属させたことで呼び起こされた対立なのだから、私が窓ガラスの像は自分であると認識したのちには、「一方の内容帰属は正しく、他方は誤っている」ということの認識をもって、この対立は解消される。一人称的、あるいは三人称的な帰属のどちらかを特権的に扱うことにより解決が図られる。しかし、対立は、二つの人称間の対立というただそれだけのことであるのだろうか。この点について考察しよう。

私は人物像が「疲れている」と判断しているのだから、「私はあの人物が疲れていると信じている」という信念の自己帰属をするなら、それは正しい信念の自己帰属である。そして私は一方で、自分自身について「疲れていない（快活な状態にある）」という気分の帰属もしている。こちらも正しい。「自分は疲れていない（自分は快活である）」と（私自身が）信じている」というのはこの現在の想定において真だとわれわれは仮定しているからである。私は自分に「私は、ある人物像（窓ガラスに映っている）が疲れていると信じている」という信念を帰属させ、このことが私の信念の正しい帰属であるのと同様、私がもう一方で内的な自己帰属により「私は自分が疲れているのではないと信じている」という信念帰属もするなら、こちらの信念の自己帰属も私の信念所持を正しく表明している。この二つは背反する。そしてどちらも「一人称的な」帰属のその点において対立している。前段落のように、同一の対象についての二つの人称間の意見の食い違いに、どちらかに優先権をあたえるような仕方で解決を与えるということは、この場合できない。このような一人称内の不整合を阻んでいる事由が、自分自身という同一物に関する私の一人称—三人称帰属の安定した相関性を保証しているのだろう。

ここまでの記述により、「この身体」が私であるという私の認識の成り立ちにとって、「性質間の一致による自己同定の見解」によって回答することが批判された。そして一人称的信念帰属に内在する論理が三人称的自己帰属の正しさの保証の一翼を担っているということが示されたと考える。

4. 一人称的視点と三人称的身体

本節では新たに、「私はこの身体である」ということがどのような事柄であるかを、仮説と予断を含む、ある種形而上学的な記述を提示することで、素描することを試みる。

私の身体とは、私が自由に動かせる身体である。「私は動ける」ということを私は自分の身体において発見する。他者の身体もある意味で自由に動かされているが、それら身体は、私の身体が私だけに示す相貌のもと独特に自由であるようには、自由ではない。「この身体」だけが独特な意味で自由である（私はその身体の腕を動かすということによって始めて、腕を自由に動かすということがどのようなことであるのか、ということを知る）のだが、そのような自由を示すものを「私の」身体と呼ぶ根拠はどこにあるのだろうか。というのも、私はその独特な自由として「この身体」のものそれだけを知っており、それが私のものであるか他人のものであるかを比較考量に掛けるに適するような、他の対照項として、他の何らの自由をも知ってはいないからだ。それが「私」の自由であることの理由は、ひとつには、そのようにして独特な自由としての相貌をその身体が示すのは「私にとってのみ」「私に対してのみ」であるという点である。その身体の自由が「私の」自由であることは、その身体他の身体との何らかの心理学的、生理学的、物理学的な違いに基づくものではない。つまり、誰でもが観察することができるような特徴として、その身体独特な自由が存在するのではない。その身体と他の数多くの身体との違いは「私にとってのみ」明らかにされるものである。私は、自分とは関係のない何か唯一的で客観的な特性を持っているものを発見するように、自分の自由を発見するのではない。私によってしか本性上発見されないようなものを、私は発見するのである。

（ある一人の人としての）他者の自由は誰でもが発見可能であるようなものである。しかし私の自由は「私によってしか」その独特な相貌のもとでは発見されることはできない。私は一人称的な「思考するもの」であるが、そのような私にとって、数多存在する三人称的な身体の中の「この身体」だけが自分のものである。私がそれだけを自分として発見するのは、私であるのはそれだけであり、そのような「私」は、私に対してのみ明らかにされるような側面を持つところの存在者であるからである。私に対してのみ明らかにされる「この身体」の側面とはその身体の一称性、その身体が一人称的にあるそのあり方である。そして、その一人称性が唯一それに対して明らかにされるところの視点は、その一人称性それ自体であるところの視点、つまりその身体自身である。このことにより、三人称的諸身体を俯瞰していたのが「一人称的」視点であったということが明らかになる。「思考するもの」の存在がまずもって、「私」によって明らかにされ、「私」による方法的懷疑のもと確実であると知られることから、次のことがわかる。その「思考するもの」としての一人称的視点の存在を知ることができるのは、その一人称それのみであり、つまりは、その一人称がそれ自体であるところの「この身体」のみである。

私はこの身体が自由であるということの発見を通して、「私が」自由であることそのことを発見する。私がある身体を自由を発見する以前は、私は私自身が自由であることを、知らなかった。私が「この身体」を私自身、として統合的に把握しなかったなら、私それ自身が統合されることも、またなかっただろう。「この身体」を他の私でないものから弁別することができなかつたら、私が私自身であることそのことができない。私がある身体を他から弁別、区別でき、この身体を自分自身であると考えた限りにおいて、私はこの身体であり、私自身である。私がある身体を自分自身であると考えない限り、諸身体の中から「自分の身体」を発見するところの一人称的視点それ自体が統合されていないということになる。

他人にとって「この身体」はなんら特別ではなく、したがってそれが特別なのはその身体自身である一人称的視点にとってのみであるという点で、「この身体」を自分とみなす一人称的視点としての私は他のどのような存在者によってもなしえない営みをしている。すなわち、「私がある身体だけ」に独特な自由を見出すとともに、この身体について「私だけ」がその独特な自由を見出す。

「この身体」にとってその身体自身だけが、その他の身体とは異なった現れ方をする。その身体は顔や背中だけが見えず、手足は視野の中央から遠心的に外側へと伸び広がっている。その身体と他の身体との関係は、独立した二身体との関係であるが、その身体は、その身体自身との関係は、そのような独立した二項のものではない。その身体は、自分に対して現れるその身体自体を「自分自身と」見做すことによって初めて、一身体としての統合性を実現する。そのような統合性が確保されないならば、その身体にとって自分自身は、他の存在から浮き出た異様な存在者である。私がある身体を「自分である」と思考して初めて、その身体は自らの統合性を実現し、また私はその身体としての自分の統合性を実現する。

私が私自身についてそれが自分と同一だと思ふことが、この身体が自らを自己として思考することである。この身体が自己を「私」として思考することで、その身体を自己として思考している一人称的視点、つまり「私」の統合性を実現される。私が私自身であるという私の思考が私に統合性を持たせ、この統合された私こそが、その思考において私が自己と同一視するところの存在自身である。つまり、私は必然的に自己を思考するような存在者であり、私は、「自己を思考しているところの自分自身」を自己自身であると思ふ。私は、私自身を思考することで存在の統合性を保っている存在者を自己であると思ふ。私は自分を思考することで、自分自身によって思考されている三人称的な存在者でもあることになり、つまり私は「この身体」を自己であると思ふ一人称的視点であるだけでなく、その一人称的視点によって思考されている「この身体」自身でもあるということになる。

5. 分裂の思考実験再考

分裂の思考実験において、まさにライティを「私」たらしめるようなライティの客観的特質など存在しない。パーフィットはここから還元主義的見解に向かったが、われわれはそれとは違い、そもそもライティをライティ自身として統合的に存在させる要素の中に

「私」が組み込まれているのではないか、という見解を前節で提示した。ライティがそもそもライティ自身であるために、ライティは自己を一人称的に存在するものとして思考する（「私」として思考する）ということが必要であるのではないか。そしてライティをそのようにして思考できるのはライティ自身以外にはいない。われわれにとってライティは自分自身ではない。しかしライティにとってライティ自身は「私」である。前節の不十分な記述にもかかわらずこのことが正しいならば、分裂の思考実験において、そもそも思考実験の状況が理解できるためには、ライティは自己を「私」と、そして同じくレフティも自己を「私」と思考することができるのだと、われわれが考えられるのでなければならない。確かに、ライティとレフティのどちらが分裂前の「私」と同一か、といった問題は残るが、問題の思考実験が、還元主義的見解へとスムーズに移行する動機を与えるということは、決して明らかではない。前節の形而上学的な記述はこのような還元主義への正面からの批判を形成しないが、「私」に関する心理学的、生理学的、物理学的事実の不在からの還元主義的見解へのストレートな移行に関して留保を促すものである。次節では、パーフィットが「私」の還元を主張する別の論証を取り上げ、考察を加えることにする。

6. スペクトラムの思考実験⁴⁾

パーフィットは「心理的スペクトラム」という想定を持ち出す。私はそのスペクトラムの片側では、今ある私の心理的連結性を維持した私自身である。それは一晩眠ったあと目覚めた私自身と同様である。しかしスペクトラムをもう片方の側へと進むにつれて、科学者により、私の脳細胞は徐々にナポレオンの脳細胞と入れ替えられる。私の脳細胞が十パーセントナポレオンのものに入れ替えられたら、私の心理的連結性のなかには、ナポレオンのものである過去の体験が想起される割合が十パーセント混入しているだろう。私はワテルローの戦いの場面のいくつかを想起するかもしれない。しかしそれでも、そのナポレオンの過去を想起しているのはこの私である。しかし割合が増加するにつれ、この結論は疑わしくなってくる。スペクトラムのもう片方の端では、私は身体的には以前の私の特徴を維持しているが、私の記憶はというと、全てナポレオンのものである。人格の同一性の心理的基準で言えば、もはや私は存在しておらず、代わりにナポレオンのレプリカが存在しているのである。

しかしもしわれわれが人格の同一性の物理的基準をとるならば、心理的スペクトラムの想定において、両方の端にいるのは同じ私自身である。そこで、パーフィットは次に、「物理的スペクトラム」について論を始める。

近い方の端よりのケースでは、科学者たちは私の脳と身体の細胞の一パーセントを、それとそっくりの代替物と取り替えるだろう。スペクトラムの中間のケースでは、彼らは五十パーセントを取り替えるだろう。遠い方の端に近いケースでは九十九パーセントを取り替えるだろう。遠い方の端では、「取り替え」は私の脳と身体の完全な破壊と、私の〈レプリカ〉の新しい有機物からの創造を含むだろう⁵⁾。

⁴⁾ ibid., p. 231.

このスペクトラムの近い方の端のケースでは、現在の私と物理的にも心理的にも十分継続している人物が「科学者による操作の」後に生ずる。遠い端のケースでは、現在の私と心理的には継続しているが物理的には継続していない人物が後に生ずる⁶⁾。

この「物理的スペクトラム」に対しても、心理的基準をとるならば、近い方の端と遠い方の端で生じる人物は共に「私」であるだろう。「心理的スペクトラム」を物理的基準の側から、「物理的スペクトラム」を心理的基準の側から捉えれば、双方において、両端の人物は私であるだろう。

そこでパーフィットは、「混合的スペクトラム」に関して論述を始める。

このスペクトラムの近い方の端にある最初のケースではなにもなされない。第二のケースでは、私の脳と身体の細胞のうちのいくつかが取り替えられる。新しい細胞は正確な複製ではない。その結果として、私と目を覚ました人物との間には心理的連結性がやや小さくなっている。後者の人物は私の記憶の全部を持ってはおらず、その性格はある点で私と違っている。（強調は原著者）⁷⁾

このスペクトラムの遠い方の端では、結果として生じた人物は、物理的にも心理的にも、現在の私と継続性を持っていない。このケースでは、科学者たちは私の脳と身体を破壊し、そして新しい有機的物質から、誰か別人の完全な〈レプリカ〉を作り出すのだらう⁸⁾。

その人物はグレッタ・ガルボ⁹⁾ かもしれない。遠い方の端にはグレッタ・ガルボの〈レプリカ〉が存在し、彼女は演技を楽しみ、グレッタ・ガルボの生涯の判明な記憶を持っている。この「混合的スペクトラム」において、近い方の端は私であったにもかかわらず、遠い方の端に生じた人物は、到底私でありそうにない。それは、心理的基準から言っても、物理的基準から言ってもそうである。この「混合的スペクトラム」は従って、前者二つのスペクトラムの議論が抱えていた欠点を克服している。

このスペクトラムのどの時点で、私は私ではなくなったのか。正確な複製ではない脳と身体細胞によって、何パーセントが取り替えられたとき、私は私でなくなったのだらうか。スペクトラムの近い方の端では私は私である。遠い方の端では、グレッタ・ガルボのレプリカが存在し、それは私ではないように思われる。そうであるなら、どこかにボーダーラインが、つまりその境の手前では私は私であり、向こう側では私が存在しなくなるような、ボーダーラインがあるのだらうか。

パーフィットは、そのようなボーダーラインはない、と論じる。そのことは、オール・オア・ナッシングを支えるような「私に関するさらなる事実」などない、ということ在意

⁵⁾ ibid., p. 234.

⁶⁾ ibid., p. 234.

⁷⁾ ibid., p. 236.

⁸⁾ ibid., p. 236.

⁹⁾ 女優。「アンナ＝カレーニナ」などを演じた。

味する。あるのは心理的継続性の漸進的な変化のみである。

7. 人格の同一性の一人称的基準と三人称的基準

私は「私」で自分を指し、グレッタ・ガルボのレプリカもまた「私」で彼女自身をさすが、その二つは同一の人格ではない。当初の「私」はどうなってしまったのか。

一つの重要な点は、パーフィットは、第三人称的に見られた人格の同一性の断絶を「私」の消滅と同じものとして考えているのではないかという点である。第三人称的に見れば、近い方の端と遠い方の端は人格的な同一性を欠いている。したがって、その人格を「私」と同一視する限り、スペクトラムのどこかの時点で「私」が消滅するという、思考実験の要点が有意味であると思われる。

しかし、第三人称的な人格の同一性の基準（三人称的な基準）と「私」の同一性の基準（一人称的な基準）は重ならないかもしれない。思考実験の自然な理解は、「私」「一人称」は近い方の端と遠い方の端で同一性を保っているという直感を支えるのに十分であるように思われる。他者は近い方の私と遠い方の私を、別の人格と考えるにしてもである。

私の一人称的な同一性の基準に人格の同一性の三人称的な基準が回収され尽くすなら、私は、自分の人格の同一性の基準がある意味知りえない。私が消滅してしまった後にも残された人格が自分と同一であるか否かを判定するための基準を、私が一人称的に持っているはずがないからである。したがってその場合、その一人称的な基準はある意味で「無基準」である。私は私が存在し続ける限りにおいて自分を自分自身と同一視するのであり、私が存在しなくなった後に関しては、それはその基準の適用範囲外である。

したがって、スペクトラムの思考実験には、三人称的基準が介入していざるをえない。なぜなら思考実験は、私であると思えたものがある時点からはもはや私とは見なしがたくなるという直感に訴えかけているからである。私はある意味では一人称的には自分のそのような消滅を思考しえない。

従って、私は自分についても明らかに三人称的な人格の同一性の基準を適用している。もしかしたら、同一性の一人称的基準のほうが三人称的基準のほうに回収し尽くされるのかもしれない。私は、自分の同一性の基準はそのような三人称的なものに「尽きる」とさえ考えているかもしれない。そうでなければ、そのような三人称的な人格の消滅を「私の」消滅と考える根拠がどうして私にあるといえるのだろうか。

一人称的な基準と三人称的な基準との関係は明らかではない。しかしこのことは、全てを三人称的な基準に還元してしまえばよいという結論を直ちには意味しない。

8. スペクトラムの思考実験固有の問題

スペクトラムの思考実験における私の断絶は、次のような三つの読み方を許容するように思われる。

①「私」の消滅

私は完全に消滅してしまった。グレッタ・ガルボのレプリカは、私に関しては、私の死体

が意味する以上のものを何も意味しない。私はグレッタ・ガルボになった「がゆゑに」消滅してしまった（③と対照的である）。

②「私」の変化

私は「グレッタ・ガルボのレプリカ」へと変化する。私はある意味では消滅してしまったが、ある意味では消滅していない。「私」は人格の同一性の「断絶」を乗り越えいまやグレッタ・ガルボのレプリカそれ自体となったのである。

③「私」の無関係性

私の消滅を意味するものなどこの思考実験の中にはどこにもない。九十パーセントの細胞が取り替えられたかもしれない。しかしその結果のグレッタ・ガルボのレプリカについて語ることは、いわば末節の事柄である。九十パーセントの細胞は、破壊されず延命装置の中で持続的に生きつづけており、つまり私は心理的継続性を保ちつつ未だに存在し続けている。グレッタ・ガルボのレプリカについて語ることは、私についての談話から私についてのものではない談話へと移行することと同じ意味しか持っていない。グレッタ・ガルボのレプリカについて未だに「私」を主題にすることは、車を修理するように言われて、修理する必要のない新車を提示するようなものである。N.N.についての語りからP.N.についての語りへと移行すること、そしてP.N.はN.N.ではないといった語りを展開することは、N.N.の同一性についてその断絶を語るのではなく、N.N.の同一性についてもはや語らないということである。

われわれはパーフィットの思考実験について、①②③のいずれが正しい解釈であるか迷うかもしれない。しかしそのような迷いは、パーフィットにとってみれば、本質的な事柄ではない。

パーフィットに従うならば、重視されるべき「私」など存在しないも同様なのである。われわれが「私」に代えて「心理的継続性」を重視するようになれば、そのような「私」の重要性など消滅してしまうだろう。われわれは①②③の読みにおいていずれも「私」というものに重きをおいている。しかし思考実験を「心理的継続性」の重視という視点から眺めるならば、それらの中からいずれかを思考実験が意味するものとして特定するという必要性はなくなる。

しかし、心理的継続性の重視を訴えかけるために構築された思考実験に基づいて、心理的継続性が重要であることを主張するという作業には、悪性の循環が含まれてはいないだろうか。①②③の多様な解釈の中での選択を迫られない理由が、①②③の仕方で解釈することをその思考実験が想定していないということに尽きるのだとすれば、その思考実験の意義もそれだけ薄まるのではないだろうか。

9. まとめと結語

われわれは分裂の思考実験に関する考察において、たとえ心理学的、生理学的、物理学的でないかなる性質によってもある人物が私であるか否かが決定されないのだとしても、「こ

の身体」が「私」であるということに固有の意味があるのではないかと論じてきた。その観点から、そのような性質が不在であることに基づいて還元主義的見解に移行するパーフィットの見解に、留保を求めた。

スペクトラムの思考実験については、人格の同一性の「一人称的基準」と「三人称的基準」が重なり合わない可能性を示唆した。両基準の異同が明らかにされない限り、スペクトラムの思考実験の説明力は曖昧なものに留まる。また、思考実験が還元主義を支持するために構築されており、その思考実験から還元主義の妥当性に結論を下すのはある種循環を含んでいるように思われるという点を指摘した。

還元主義的見解への批判を試みてきた。いまだ決定的な議論とは言えず、一人称の重要性も確定的に確立するには至らなかったかもしれないが、ひとまず論述をここまでとする。

文献

- Evans, G., 1982, *Varieties of Reference*, Oxford University Press.
- Hamilton, A., 1995, "A New Look at Personal Identity", *Philosophical Quarterly*, 45.
- McDowell, J., 1997, "Reductionism and the First Person", in J. Dancy (ed.), *Reading Parfit*, Wiley-Blackwell.
- Nagel, T., 1986, *The View from Nowhere*, Oxford University Press. [『どこでもないところからの眺め』, 中村昇・他訳, 春秋社, 2009年.]
- Parfit, D., 1984, *Reasons and Persons*, Oxford University Press. [『理由と人格』, 森村進訳, 勁草書房, 1998年]
- Shoemaker, S., 1994, "Self-Reference and Self-Awareness", in Q. Cassam ed., *Self-Knowledge*, Oxford University Press.
- Wittgenstein, L., 1958, *The Blue and Brown Books*, Basil Blackwell. [『青色本・茶色本他』, 大森荘蔵・杖下隆英訳, 大修館書店, 1975年.]
- 1953, *Philosophical Investigations*, translated by G. E. M. Anscombe, Blackwell. [『哲学探究』読解, 黒崎宏訳, 産業図書, 1997年.]
- Wright, C., 1998, "Self-Knowledge: The Wittgensteinian Legacy" in C. Wright, B. C. Smith eds, *Knowing Our Own Minds*, Oxford University Press.
- 坂倉涼, 2009, 「エヴァンズにおける「透明性」という概念について」, 『哲学の探求』, 哲学若手研究者フォーラム第36号, pp. 103-118.
- 永井均, 1986, 『〈私〉のメタフィジックス』, 勁草書房.
- Rick Grush, "Guide to Gareth Evans' *The Varieties of Reference*", <http://mind.ucsd.edu/misc/resources/evans/evansindex.html>.